そうして、
人類（ホモ・サピエンス）の時代は
終わりました。

第66回
ベルリン国際映画祭
フォーラム部門出品作品

第70回
エディンバラ国際映画祭
最優秀長編ドキュメンタリー賞ノミネート

『いのちの食べかた』ニコラウス・ゲイハルター監督最新作

人類遺産

HOMO SAPIENS

A FILM BY NIKOLAUS GEYRHALTER

Director and Cinematographer NIKOLAUS GEYRHALTER Editing MICHAEL PALM Sound Design PETER KUTIN, FLORIAN KINDLINGER
Sound Re-Recording ALEXANDER KOLLER Location Research SIMON GRAF Research MARIA ARLAMOVSKY
Camera Assistants SIMON GRAF, CHRISTOPH GRASSER, SEBASTIAN ARLAMOVSKY, THOMAS CERVENCA
Production Managers KATHARINA PÖSCH, FLAVIO MARCHETTI, LIXI FRANK Executive Producer MICHAEL KITZBERGER
Producers NIKOLAUS GEYRHALTER, MICHAEL KITZBERGER, WOLFGANG WIDERHOFER, MARKUS GLASER

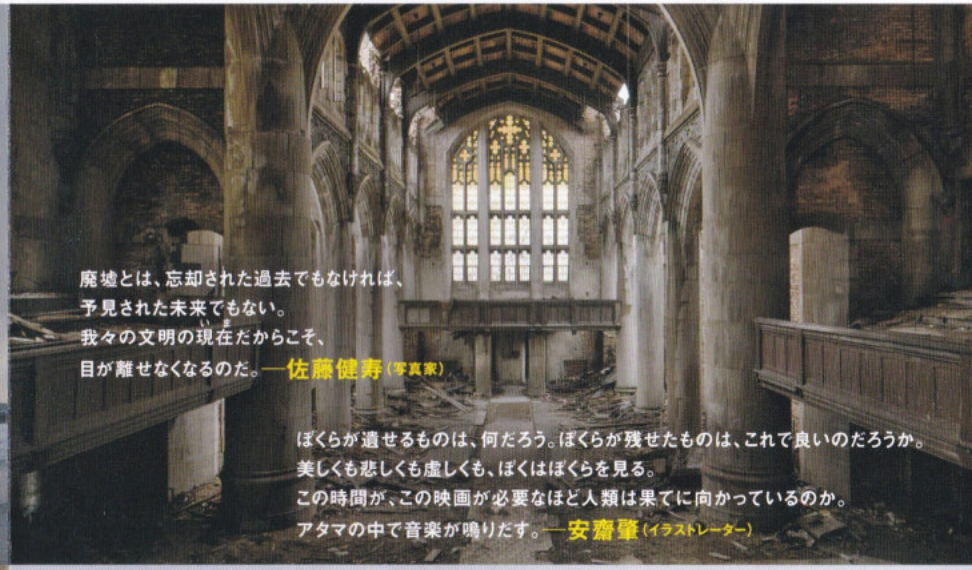
世界70ヶ所以上の廃墟と対話をする、時空を超えた新感覚の映像体験。

日本で10万人が観た大ヒット作『いのちの食べかた』のニコラウス・ゲイハルター監督最新作

撮影期間4年、世界70ヶ所以上にも及ぶ“廃墟”にカメラを向けた唯一無二の映像集

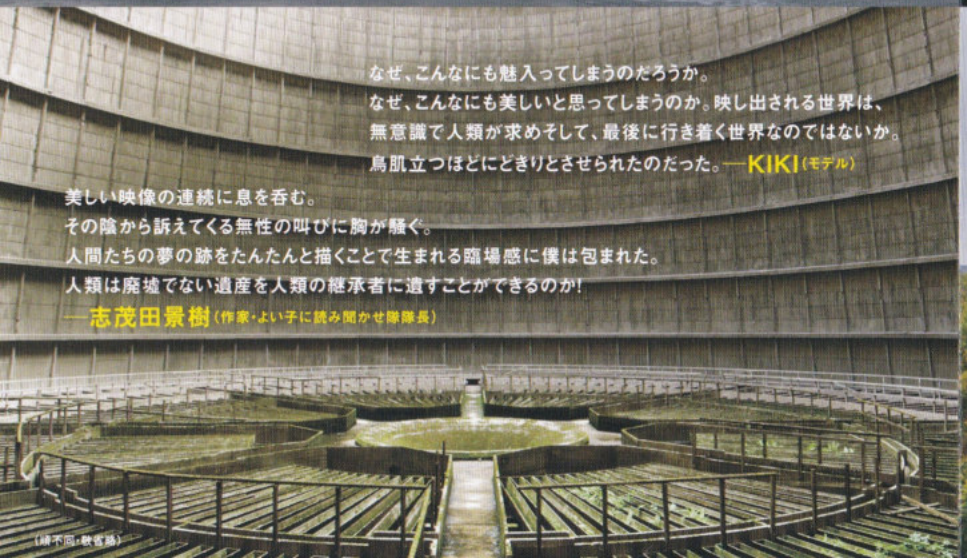
記録的なロングランヒットとなった『いのちの食べかた』(07)で一切のナレーション・音楽を排し「食糧」の生産現場を見せ、『眠れぬ夜の仕事図鑑』(12)では世界の「夜に活動する人々」に焦点を当て、美しい映像のなかにも痛烈な社会批判や、現代社会に警鐘を鳴らすメッセージが込められた作品を撮り続けるゲイハルター監督。彼がこの最新作で切り撮るのは、かつて人間の手によって作られ、利用され、やがて人間の都合で放置され、朽ちゆく世界の“廃墟”だ。これまで通り何の説明もいらない圧倒的な映像美のなか、本作ではついに人物すら登場しない、まさに究極の世界観を創り上げている。私たちが見ている光景は過去の産物なのか? それともこれが未来の世界なのか? そもそも人類がこの地球に存在する意味とは何なのか? “棄てられた風景”が、今静かに語りかけてくる—

人間は一切登場しない。しかし人が不在であることで、
人の存在—不在による存在—が強く喚起されてくる。
私たちが見るものは、すべて人間がいたことを示す痕跡とそれを掻き消す自然のプロセスなのだ。
そして風景が、語り始める。—四方幸子(キュレーター、多摩美術大学・東京造形大学客員教授)



廃墟とは、忘却された過去でもなければ、
予見された未来でもない。
我々の文明の現在だからこそ、
目が離せなくなるのだ。—佐藤健寿(写真家)

ぼくらが遺せるものは、何だろう。ぼくらが残せたものは、これで良いのだろうか。
美しくも悲しくも虚しくも、ぼくはぼくらを見る。
この時間が、この映画が必要なほど人類は果てに向かっているのか。
アタマの中で音楽が鳴りだす。—安齋肇(イラストレーター)



なぜ、こんなにも魅入ってしまうのだろうか。
なぜ、こんなにも美しいと思ってしまうのか。映し出される世界は、
無意識で人類が求めそして、最後に行き着く世界なのではないか。
鳥肌立つほどにどきりとさせられたのだった。—KIKI(モデル)

美しい映像の連続に息を呑む。
その陰から訴えてくる無性の叫びに胸が騒ぐ。
人間たちの夢の跡をたんたんと描くことで生まれる臨場感に僕は包まれた。
人類は廃墟でない遺産を人類の継承者に遺すことができるのか!
—志茂田景樹(作家・よい子に読み聞かせ隊隊長)

(横木岡・秋雷鳴)

ニコラウス・ゲイハルター監督から福島トライアルのリサーチと
アテンド(案内役)を頼まれた。私は彼のクルーと共に、
立ち入りが制限されている浪江町の放射線管理区域内に入った。
浪江町で、かつてそこにあった、もはや人の手のついていない場所を
ゲイハルターは探していた—。—岩崎孝正(映像作家)

私たちの、この現在の暮らし振りを、遠い未来の何者かが
発掘したとしたら、いったい何を想うのだろうか。
ものものは、やがては朽ち果て、雨に砕かれ、風にさらわれ、
微生物が食べ尽くし、粉々に還ってゆく。
でもそこに、確かにあった、暮らしの気配や、奏でられた音や、
響きや、情熱や、息吹や、そんな魂のようなものは、いつまでも、
ゆらりゆらりと漂い続けているのかもしれない。—高木正勝(映像作家・音楽家)